


樋野康二

大平印刷  
制作部長

 そのメガネをかけると  
オレンジは何色に見えますか？



一般色覚者の見え方



色覚障害者の見え方



一般色覚者の見え方



右側がP型とD型の見え方の例。色覚は人によって微妙に異なるので、一般色覚を含め必ず上のように見えているとは限らない



色の見分けにくさを疑似体験できる伊藤光学工業の「バリエントール」。価格は3万4500円  
<http://www.variantor.com/>

*profile*

ひのこうじ / 1963年、大阪府生まれ。1986年、大阪芸術大学芸術学部デザイン学科卒業。1986年、大平印刷に入社、デザイン課に配属。1994年、デジタルプレゼンテーションセンターでDTPやウェブサイト制作を推進。課長、次長を経て2006年、制作部長に就任

## ユニバーサルプリンティングを普及実践中

大平印刷の樋野康二・制作部長がかけているメガネは、色覚障害者が感じる色の見分けにくさを疑似体験できる伊藤光学工業の「バリエントール」だ。印刷物のユニバーサルデザイン（UD）に取り組む大平印刷は、4月から販売代理店を請け負っている。

色覚障害に配慮した印刷物をデザインする際、専用ソフトを使って文字の視認性や色の識別性をパソコン上で検証するケースが多い。「バリエントールならカンパや色校正紙といった現物を見ながら簡単にチェックできる。時間も手間もかからない」（樋野制作部長）。屋外の看板やサインも確認できる点が強みだ。

色は人によって見え方が異なる。例えば黄緑色とオレンジ色、黒と赤などを判

別しにくい人もおり、一般に色覚障害者と呼ばれる。色覚障害者の色覚はP型、D型、T型に分類でき、ほとんどがP型とD型のどちらかに属する。バリエントールはそのP型とD型の色覚を疑似体験できるツールだ。上の地図とグラフを見てほしい。分かりやすくするために色に差を付けたはずが、色覚障害者にはその配慮が伝わりにくい。

### 男性の20人に1人が異なる色覚

大平印刷は2005年、印刷物にUDを採り入れる“ユニバーサルプリンティング”を商業印刷物に導入。開封性や視認性の向上、軽量化、ページのめくりやすさといった工夫に取り組んでおり、色使

いに対する配慮はそのうちの1つだ。

日本における色覚障害の割合は、男性の20人に1人、女性の500人に1人と言われる。株主総会で企業が配布する資料の中に、グラフが多く掲載されていた場合、重要な数値を読み取れない株主も出てくるだろう。環境報告書やCSR報告書、企業広報誌など、企業姿勢が問われる印刷物において、読みやすさへの配慮は必須だ。色だけに頼らず、罫線を入れたり、輪郭を囲ったりといった補助があれば、より多くの人が読みやすくなる。

「ユニバーサルプリンティングに理解を示し、導入する企業が徐々に増えてきている」（樋野制作部長）。印刷の未来を考えた場合、環境配慮と同時に課題となるのはUDに違いない。